

平和教育の実践と課題

—歴史教育者協議会の歩みから—

小林 朗

現在の平和教育の危機的状況

今日、世界的に保守的な潮流が大きくなっている。ヘイトスピーチは地球上にこだましている。排他的な動きは一部の過激なテロ行為によって拍車がかかっている。なぜ人間は仲良くできないのだろうか。

日本の安倍内閣も、戦後70年間続いた憲法九条の「平和」を壊そうとしている。暴走する安倍首相は「こわい!」と思っている人々が増えている。

戦争への危機が迫る中で、私たち社会科教師は何をしてきたのだろうかと反問してしまふ。一教師ができることは些細なことである。しかし、全国の社会科教師は自分なりの平和教育を実践してきたことは間違いない。

ない。そして、なぜ「平和」が危うい状況になっているのか、自己の「平和教育」を自省しているといえる。

本稿はこの状況をいかに打開していけるのか、「平和教育」で県内の歴史教育者協議会の歩みを中心に振り返りかえりながら、どのような「平和教育」が必要か模索していきたい。

私の平和教育の洗礼

1983（昭和58）年、私は南魚沼市のS中学校に新採用で赴任した。この年、県歴史教育者協議会は同市のY小学校で土田光男先生の六年生の社会科「十五年戦争」を授業公開した。

この授業ではY地区で十五年戦争時、亡くなった方

のお墓調べを小学生が夏休みの宿題として行った。それを教材として授業は展開した。十五年戦争が地域ではどのようなものかを小学生が学ぶのである。地域教材の有効性が発揮された。

授業の結末にはY地区で発見された遺言書を土田先生が教室全体に音読をされた。途中で土田先生は生徒の前で涙を流された。教室はシーンとなり、参観している教師たちももらい泣きをした。平和教育は感性で訴えることを私に認識させてくれた授業といえた。

私はこの授業を受けて、翌年の1984（昭和59）年、S中学校の二年生に十五年戦争のお墓調べを夏休みの宿題にした。南魚沼は寺院にお墓は少なく、各村に墓がある。

この墓調べで多くのことが判明した。広島の原子爆弾で亡くなった方が、この地域にも存在した。中学生の驚きはすごいものであった。墓を調べる中で、日清日露戦争の墓はとも大きい、十五年戦争で年代が現在に近づくほど、墓が小さくなっていくのである。墓には死んだ年月と場所が側面に刻んである。中学生に死んだ場所を世界地図に印をつけさせた。S中学校の学区は中国の新木橋という場所に多いことがわかつ

た。陸軍歩兵部隊の戦死者である。雪国の兵隊は歩兵になっていた。

中越教育事務所への指導主事が参観する公開授業であったため、多くの社会科教師が集まった。授業を観た教師からは地域教材からアプローチした十五年戦争の授業に賛同が得られた。

地域に十五年戦争があることを中学生は実感した。私は日本人が被害者になっていることと、加害者になっている両面をこの授業で実践しようと試みた。地域の中に加害面を教材化は難しい。歴史教育者協議会は十五年戦争の学習で、民衆の「加担」という側面を主張していた。加害ではないが、知らぬうちの戦争協力者になっている民衆であった。

南魚沼地域ではダムをつくるのに朝鮮人の人々を強制労働させた。中学生の聞き取りで、ダムづくりで日本人には命綱をつけたのに、朝鮮人にはつけなかったことがわかった。文献史料ではないが、複数の聞き取りの中で事実が出てきた。

小学校とは違い、中学校の平和学習は感性だけでなく、被害・加害・加担面の三面から授業化することが大切であった。

前近代史の平和学習

歴史教育者協議会は全国でも新潟県内でも歴史学習において、時代区分で近現代史学習の授業実践が多い。前近代史の授業実践は少ないのである。これは平和教育にも共通している。日本が戦争に、直接加わった十五年戦争に対する思い入れは強い。前近代史の平和教育についてふれておきたい。

歴史教育者協議会だけでなく、社会科教師は前近代史の平和教育は鎌倉時代のモンゴル来襲で集約されていると言つてよいだろう。

私の30年以上、中学歴史学習で実践してきたモンゴル来襲をご紹介したい。

鎌倉幕府は2度にわたるモンゴル来襲を自ら阻止したと考えていた。神風（台風）発生と朝廷の「敵国降伏」によるものであった。もちろん、御家人たちが果敢にモンゴルと戦ったことは事実である。1回目には御家人たちが一騎打ちで戦つたために、集団戦法、火薬などに翻弄された。2回目は石塁をあらかじめつくり、夜撃ちで対抗した。大型の台風によってモンゴル軍の船隊は消えたのである。幕府は無謀にも逆にモン

ゴルへ攻めることを計画する。大型船を準備できないことで頓挫することになる。

教科書の記述自体がモンゴル来襲を「元寇」としていることにも課題が存在する。

モンゴル来襲で日本を救つたのはアジア民族だということも中学生に学習させることが大切である。まさにグローバルな視点といえる。次の点について授業課題を選んで、生徒に提起することになっている。

(一) 朝鮮はモンゴル来襲でどんな役割をしたのか？

(二) モンゴル来襲の3回目がなくなった理由は何か？

モンゴル軍は、日本への侵略より40年以上も前の1231年に高麗への侵略を始める。翌年、高麗は都を開京から江華島に移して抵抗を続ける。約30年間に6度の侵略と戦つた。1259年に高麗王朝は降伏したが、1270年には高麗の治安部隊である三別抄が蜂起し、民衆とともに4年間も抵抗した。この間、三別抄は日本に援軍を求める使者を送るが、日本は無視す

る。この高麗の人々が日本へのモンゴル来襲の船隊を製造することになる。多くの中学生にどのように船をつくるのだろうかと予想させる。その上、日本のモンゴル来襲の船隊はモンゴル・南宋・高麗の三軍の混成軍であった。モンゴルに滅ぼされた南宋や高麗が真剣に日本と戦うのか中学生は疑問を持つのである。

元のクビライは日本への侵略に必死になるが、高麗だけでなく、諸民族は激しい抵抗運動を展開した。

ベトナムは1257年以降、3回にわたるモンゴル侵略を退けた。北方のアイヌ民族も抵抗を続けた。クビライは日本の3回目の侵略どころではなかったのである。

アジアの民族の抵抗が日本のモンゴル来襲を阻止する大きな要因になった。近現代史だけでなく、前近代史でも「平和」を考える実践になる。

近現代史学習の重要性

戦後、新潟県内において歴史教育者協議会の会員による近現代史学習の実践を行ってきた。

シンガポール日本人学校に勤務した元中学校教師の小林正弘先生の実践に学ぶことが多い。

十五年戦争で、大東亜共栄圏を形成するとしながら、実際はアジアの人々に対して虐殺を行った事実を丹念に調べて、授業実践を続けてこられた。小林正弘先生のすばらしいところは、授業実践だけでなく、社会科教師のためのアジアの旅を何回も企画し、実行したことである。韓国、シンガポール、マレーシアといった日本軍の跡を訪ねていった。私も数回、同行させてもらったが、学ぶ成果がたくさんあり、授業の教材化に大変、役立った。一般的な旅行業者のツアーと違い、娯楽や買い物以上にアジアでの戦争の爪痕を巡って行くとを話してくれたのも有意義といえた。小林先生はガイドの方に「事実を伝えてもらいたい」とストレートに注文される。最初、戸惑っていたガイドが日本軍の虐殺の事実を話すときに幾度も遭遇した。文献史料では味わえない生の声であった。シンガポールの刑務所跡で、ガイドが日本軍の虐殺の実態を話された。その状況は凄まじいものであった。今現在でも忘れることはできない。中学生だけでなく、教師の歴史認識も育てられた近代史学習の旅であった。

民間教育団体である歴史教育者協議会は先輩の社会

科教師から多くの教材を学ぶことができたのである。一世を風靡しているアクティブラーニングではなく、真理を問う授業のバトンタッチが求められている。

現在、戦争体験者が少なくなっているが、近現代史学習を継承する社会科教師もいなくなるのが危惧されている。現在、現役の社会科教師がその精神を引き継ぐことが大切である。歴史は過去のものではない。新史料の発掘は平和学習でも欠かせない。

すべての教育は平和教育

戦後70年を迎えた今年、核廃絶や平和を尊重する教育が現在こそ重要になっている。実現するために、新潟県の歴史教育者協議会の平和教育の実践を私なりに紹介した。しかし、私自身の範疇でしかなく、どこまで軌跡を述べられたかは自信がない。

歴史教育者協議会の全国的な先達であった黒羽清隆さんの平和教育について述べて、稿を閉じたい。

黒羽さんはアメリカの平和教育のための教師の自己教育を以下の七点として紹介している。

- 第一は戦争の恐ろしさ、残酷さを十分に理解する。
- 第二は戦争の根本原因を研究しなければならない。

第三は戦争を避ける方法を研究する必要がある。

第四は世界の現状について情報を与える。

第五は人間の性質及びその社会生活の法則を理解する。

第六は特に宣伝について研究しなければならない。

第七は平和の問題は国家間だけでなく、国内、地域社会の中、自分の教室の中の問題としていつも考える。

この七点を踏まえて、子どもの幸福の体験を与えていくことを強調している。現在でも傾聴に値する。

黒羽さんは「きわめて困難というよりほかに形容語のない『後退戦』のなかに、いま、私たちはおかれている。そうした戦場で日夜くるしんでいる先生方のために、この本が峰歩きのとき山伏（修験者）がたべるという行者ニンニク一、二粒ほどの力づけになることを私はいのつている。」（『十五年戦争と平和教育 弱者・庶民史からの実践的ノート』地歴社 1983年）と書いている。これは30年以上、経過した今までの平和教育に奮闘する教師を励ましている。

（こばやしあきら・新潟市中学校教員）